



立正大学の海外佛跡調査

From
To

TILAURA-KOT KARA-TEPE



ごあいさつ

立正大学は仏教系大学として創設された国内屈指の伝統を誇る総合大学です。仏教を基幹とする教育は、変わることなく大学存続の基本理念として機能しています。

立正大学が海外で実施した仏教遺跡の調査は、昭和42年からの10年間にわたって実施したネパール王国のティラウラ・コット遺跡をはじめとします。釈尊が出家前に居住したカピラ城の有力比定遺跡の調査であり、釈尊の時代の遺物を確認するなどの相応の調査成果を挙げました。

中央アジアのシルクロードの地であるウズベキスタン共和国に所在するカラ・テペは、1世紀から3世紀代を盛期として展開したこの地方最大の仏教遺跡であり、半世紀以上の調査歴のある重要な遺跡です。立正大学は仏教学部と文学部の共同事業として、カラ・テペ遺跡の全容の解明と遺跡の変遷確認を調査目標として2014年度から調査を開始しました。

今回の展示では、立正大学の社会的な学術貢献としての過去と現在の海外仏教遺跡の調査を取り上げ、それぞれの成果を纏めました。

平成27年6月

立正大学博物館館長 池上 悟

目次

ごあいさつ／目次／凡例

1. 釈迦の故郷カピラヴァストゥ ティラウラ・コット遺跡	1
2. カラ・テペ遺跡	4
3. カラ・テペ遺跡周辺の仏教遺跡	8

凡例

- (1) 本図録は、立正大学博物館第10回企画展展示図録として作成しました。
- (2) 本図録の作成は池上悟（当館館長）の指示により、三宅慶（当館学芸員）と池田奈緒子（当館非常勤学芸員）が担当しました。
- (3) 3. カラテペ遺跡周辺の仏教遺跡は、文学部史学科専任講師の岩本篤志先生に執筆をお願いしました。
- (4) 本図録に用いた挿図の出典及び、引用・参考した文献は巻末に掲げました。
- (5) 本企画展開催にあたり、以下の方々・機関にご協力を賜りました。感謝申し上げます。
坂詰秀一（立正大学名誉教授）、安田治樹（立正大学仏教学部教授）、
手島一真（立正大学仏教学部教授）、立正大学ウズベキスタン学術調査隊

1. 釈迦の故郷カピラヴァストゥ ティラウラ・コット遺跡

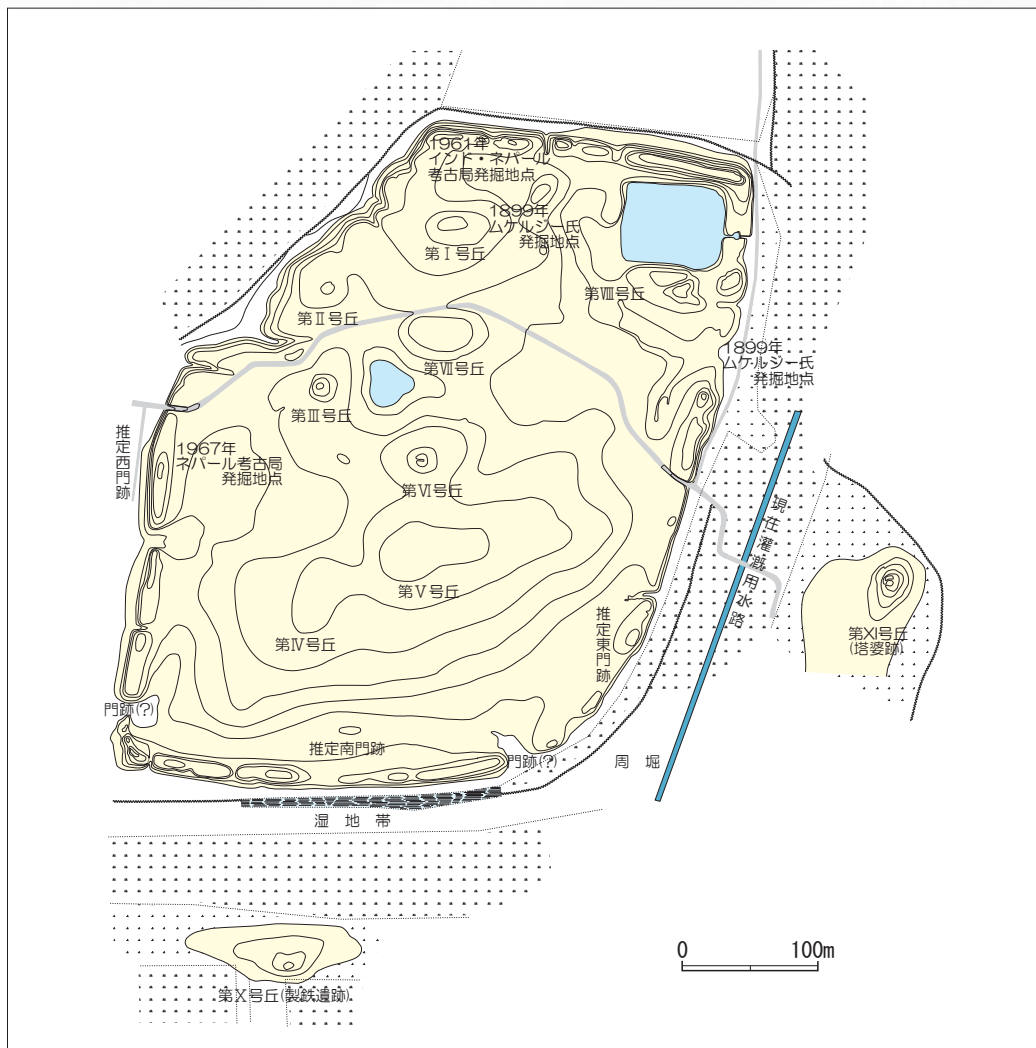
カピラヴァストゥ（カピラ城）とは、釈尊が太子シッダルタとして29歳までの青年時代を過し、出家を決意された故城です。そして、ティラウラ・コット遺跡はそのカピラヴァストゥの有力な比定遺跡の1つです。

カピラヴァストゥは、5世紀に渡印した法顕の『高僧法顕伝』、7世紀の玄奘の『大唐西域記』においてその存在が言及されています。例えば両記録には、釈尊誕生地のルンビニーからカピラ城へいたる距離などが記されており、その後

の探索の手がかりとなりました。

カピラヴァストゥの所在地問題は、19世紀末葉のA・カニンガムのナガル説（1871年）に始まり、フューラーのサガルハワー説（1897年）、ムルケジーのティラウラ・コット説（1899年）といったように多くの見解が提示されました。特にムルケジーの説は蓋然性の高いものでした。

しかし、有力な比定地としてティラウラ・コット遺跡が提唱されていながらも、確定には至っ



ティラウラ・コット遺跡

ていませんでした。その最大の理由は、それを確実に裏付ける遺物の出土が知られていなかったためです。1962年にD・ミトラが発掘調査を行いました。しかし、釈迦時代に遡ることは出来ないと結論付けました。こういった状況を打破し、比定地問題に大きな一石を投じたのが立正大学インド・ネパール仏跡調査団の発掘調査です。

ティラウラ・コット遺跡は、ネパール王国の南部、インドとの国境に近いルンビニー州タウリハワーに位置しています。立正大学インド・ネパール仏跡調査団は昭和42～52年（1967～1977年）にかけて8次にわたり遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、東西約450m、南北約500mで南北に長軸をもつ長方形状を呈する城塞遺跡であることが再確認されました。また、周囲にレンガの壁をめぐるしているこの遺跡は、4つ

以上の門、2つの貯水池、8つの建物跡が所在することも明らかにされました。検出された遺構は建物跡、井戸、埋葬遺構等です。そして、当遺跡がマウリヤ朝（B.C.4世紀）～クシャーナ朝（A.D.3世紀中葉）頃であることが明らかになりました。

出土遺物は土器、土偶、煉瓦、鉄製釘・棒・鏃、青銅製容器・装飾品・腕輪・鈴、石製容器・針、そして貨銭など非常に多様です。中でも、北方黒色磨研土器の出土は、当遺跡が、釈迦の時代にまで遡りうることを明らかにしました。この地域で城塞遺跡で、北方黒色磨研土器が出土している遺跡はティラウラ・コット遺跡のみです。その為、この調査により本遺跡がカピラヴァストゥである蓋然性をより高めたと言うことが出来ます。



ティラウラ・コット遺跡



調査の様子



銅製品（孔雀）出土状況



第1次調査団メンバー



黒灰色土器（シュンガ期）



煉瓦（シュンガ期）



赤色土器【片口付埴形土器】
（シュンガ期・クシャーナ期）



鉄製品



赤色土器【壺形土器】
（シュンガ期・クシャーナ期）



テラコッタ【人物】
（シュンガ期・クシャーナ期）



テラコッタ【動物】
（シュンガ期・クシャーナ期）

ティラウラ・コット出土遺物

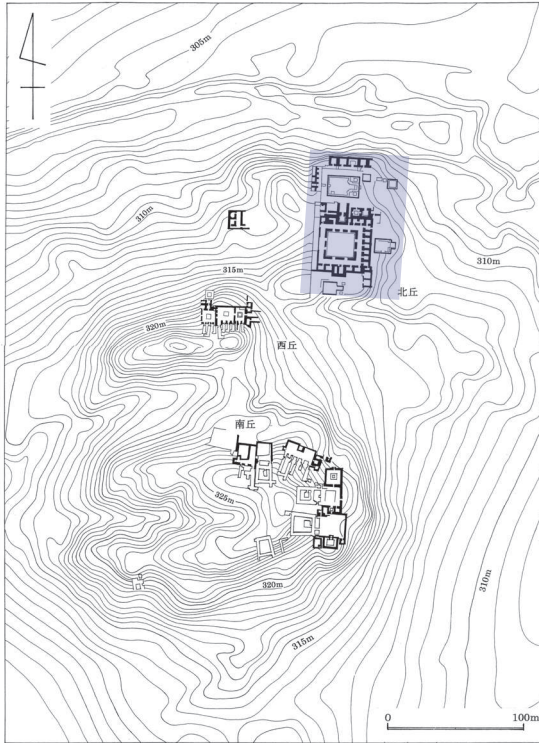
2. カラ・テペ遺跡

ウズベキスタン共和国の南東端部を占めるスルハンダリヤ州の州都テルメズ（Termez）郊外に立地するカラ・テペ（Kara-Tepe）遺跡は、古代バクトリア地方における代表的な仏教遺跡です。遺跡はテルメズ市街地の北西郊外、南に隣接するアフガニスタン・イスラム共和国との国境である大河アマダリヤ（Amudar'ja）の北岸に占地しています。

古テルメズ都城址は、いくつかの門を有する幅7～8mの防壁によって囲われており、南北1500m、東西5000mに及ぶ大規模なものです。この内側の西南端部のアマダリヤに面する地点に、南北300m、東西550m規模の方形区画の内城（Citadella）が構築されています。

また東側においては南北50m、東西30mの大規模建物跡が確認されており、13世紀代以降の造営と想定されています。この建物の東南部には11世紀代の宮殿風建物が確認されています。さらに、都城址内には9～10世紀の宗教施設、道路跡、水路なども各所で確認されており往時の隆盛を窺わせています。

カラ・テペ遺跡を含めて、ヒンドークシュ山脈の北側のアマダリヤの流域には、多くの仏塔、僧院、石窟寺院などの仏教遺跡が所在しており、インドに起源した仏教が、わが国に至るまでの歴史的な所産として注目されるものです。これらの古代遺跡は、紀元前から長期間にわたって様々な民族によって形成されたもので



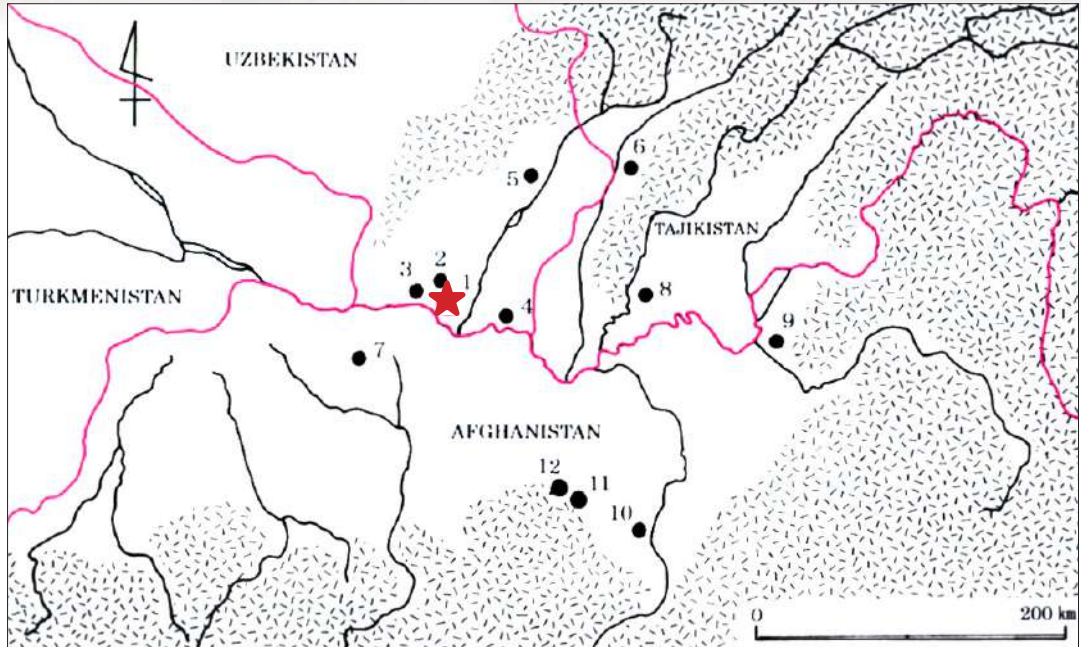
カラ・テペ遺跡全体図



カラ・テペ遺跡北丘 Main Stupa

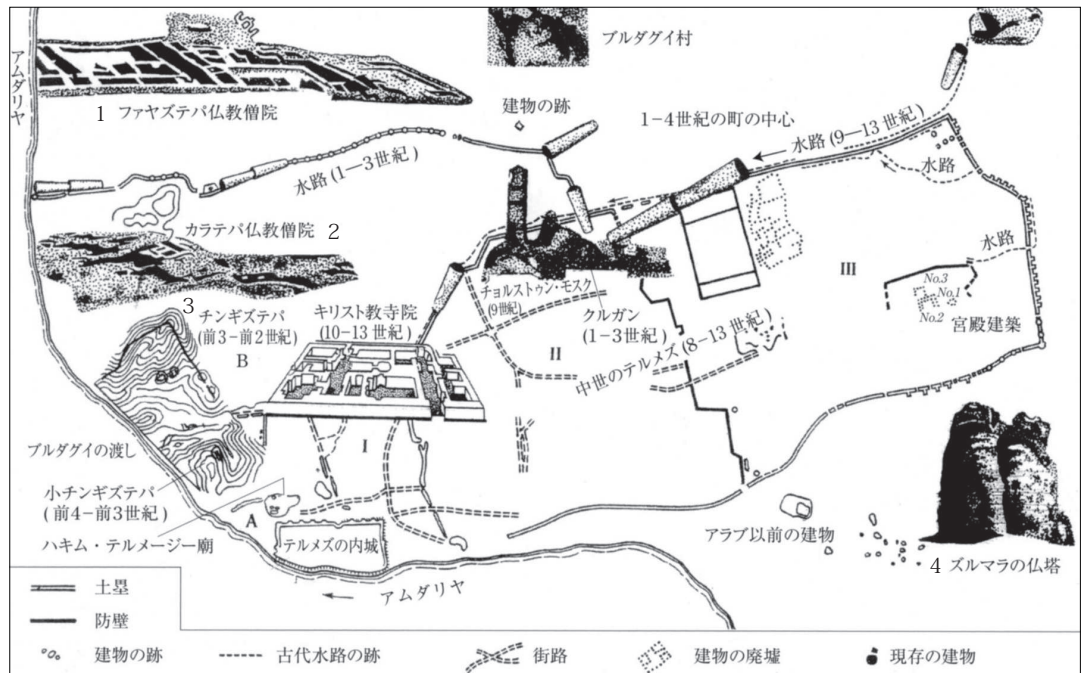


6室入口保護施設



カラ・テペ遺跡周辺の仏教遺跡

- 1 カラ・テペ 2 ザール・テペ 3 カンビル・テペ 4 アイル・タム 5 ダルヴェルジン・テペ
 6 カライ・カフィルニガン 7 ティルベルジン・テペ 8 カフィル・カラ 9 アイ・ハナム 10 スルフ・コタル



カラ・テペ遺跡周辺の仏教遺跡（拡大）

『考古学が語るシルクロード史・中央アジアの文明・国家・文化』より転載、一部加筆

- 1 ファイヤズ・テペ 2 カラ・テペ 3 チンギス・テペ 4 スルマラの仏塔

あり、アムダリヤ流域の古代バクトリア地方の重要性を物語るものとして位置づけられています。また、7世紀の中国僧である玄奘が、このバクトリアの地を訪れたということが『大唐西域記』に記されています。

カラ・テベ遺跡は南北420m、東西250m規模の丘上に展開した遺跡であり、その地形によって大きく南丘、西丘、北丘に区分され、それぞれの丘上に遺構が遺存しています。南丘と西丘には、砂岩層を掘削して構築された洞窟施設と、この前面に日干し煉瓦で構築された地上施設との複合遺構を特徴としています。

2014年に立正大学調査隊が発掘調査を開始した地区は、カラ・テベ遺跡の北丘に構築された僧院の西側通路部分です。

カラ・テベ遺跡北丘の遺構の特徴は、僧院が東西45m、南北50mの規模であり、この北側・東側・南側に大形の方形基壇の仏塔を配置する伽藍の特徴を有しています。

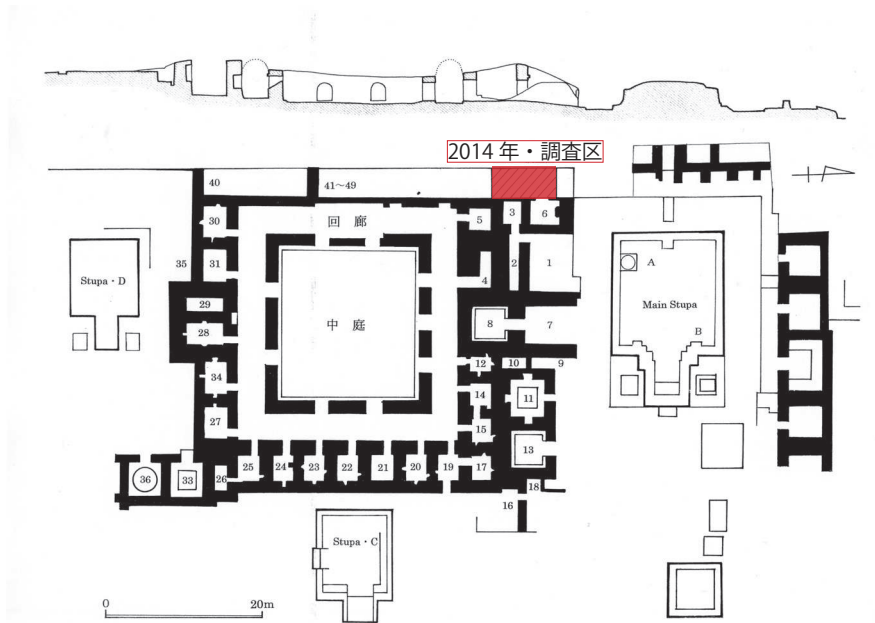
僧院は、中央に配置された中庭が四方に入口を有する隔壁によって囲まれており、この外側の四周に回廊を巡らし、西側を除く3方に僧坊

を配置しています。西側回廊のみには僧房が付設されておらず、西側の通路に続く入口があります。また、北端部の壁面には幅1mほどの龕が設置されています。

この度の発掘調査は、西側回廊の外側の通路部分の様相を解明するために調査区を設定して実施されました。

調査区は僧坊6室の西側に当たっており、以前調査された6室への入り口部分が確認されました。また、掘下げの途中で、6室の入り口部分を日干し煉瓦でコの字形に囲った施設を確認しました。この日干し煉瓦の上面は底面から180cmの位置にあり、調査区部分が埋没する中途において6室への入り口部分を補強した施設と考えることができます。

今回の調査で出土した遺物は、石灰岩製の柱頭部分の装飾片、青銅製品の破片、眼を表わしたものと思われる壁画片、塑像の指の破片、塑像の葡萄を表わした破片、建築部材として利用された日干し煉瓦片、石材片、そして若干の土器片が確認されています。



カラ・テベ遺跡北丘の伽藍全体図



僧坊北側回廊



僧坊中庭



調査状況



調査状況



塑像の葡萄を表した破片



柱頭部分の装飾片



塑像の指の破片



土器の把手



壁画片



土器片



土器の蓋の破片

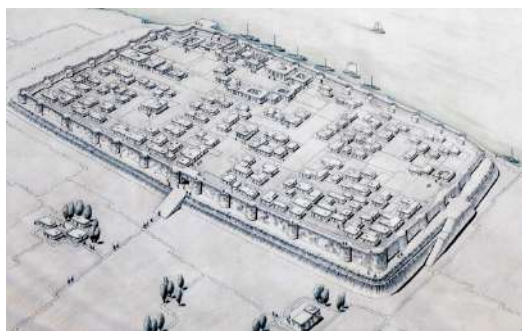
3. カラ・テペ周辺の仏教遺跡

ファヤズ・テペ

テルメズ市から北西に8km、カラ・テペから700mほど離れた場所に位置する仏教伽藍です。1～4世紀に造営されていたとされ、ストウーパ（仏塔）と僧院から構成されています。最近の研究では3世紀後半のものとされる見事な三尊仏や壁画が発見されており、遺跡はユネスコ日本信託基金による保護修復作業が行われました。



僧院の中庭からストウーパを撮影



古テルメズ復元図（城壁前の説明より）

ズルマラの仏塔

テルメズ市から北西に約7kmの畑の中に位置する高さ13mのストウーパの遺構です。2世紀、クシャーナ朝のカニシカ1世の創建とされ、現存するストウーパとしては中央アジア最大とされています。盗掘口があるほか大きなヒビがはいており、早急な保全措置が必要とされています。



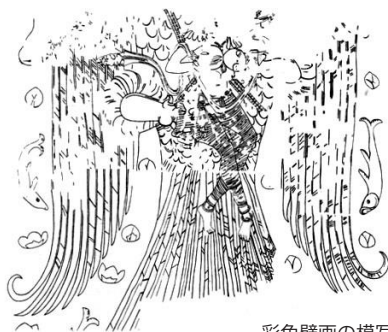
ズルマラの仏塔

古テルメズとチングス・テペ

テルメズ市から北西に約7km、両遺跡ともアッ＝テルミーゼー廟の近くに位置しています。古テルメズ遺跡はモンゴルに破壊される以前のテルメズの内城で、北部バクトリアの商業の中心でした。一方のチングス・テペは、アムダリヤ沿いの郊外に設けられた祭祀・城砦遺跡です。テルメズではギリシア由来の神々や土着の神々、またゾロアスター神のほか、仏教も受容されていました。古テルメズからはストウーパの基壇が発見されており、チングス・テペからは仏教寺院の址をふくむ多様な信仰の変遷を示す建物址が見つかっています。チングス・テペはクシャーナ期の後には要塞化されました。古テルメズは7世紀以降にはイスラームを受け入れ、ますます発展しました。

ザール・テペ

テルメズから北西に約 26km、幹線道路から数百 m 離れた畑の中にある一辺約 400m の正方形のクシャーナ期の城址です。城址の四周には塔のある防壁と壕がめぐらされていました。また北壁には仏教礼拝室の跡があり、金箔を施された仏像の一部が発見されたほか、東壁から 250 ~ 270m のところにクシャーナ期後期のストゥーパの址が発見されています。また、ガルーダ神話の系譜に連なる「翼をひろげた大きな鳥が女神を捕まえた構図」の彩色壁画が発見されました。



彩色壁画の模写
加藤九祚『アイハヌム 2001』より

アイルタム

テルメズの東方約 18km に位置する仏教僧院址です。グレコ=バクトリア期の構造物の址に僧院が建築されたといわれています。アムダリヤの以前の渡河地点にあり、ソ連時代にアフガニスタンとの間に橋がかけられ、遺跡の跡形はありません。有名な石灰岩のフリーズの楽人像や台座にバクトリア文字が刻まれた男女の立像などが発見されています。ストゥーパや建築様式などカラ・テペと比すべき点が多く伺えます。



楽人像（壁装飾の一部）

Buddhism and Buddhist Heritage of Ancient Uzbekistan,
Tashkent, 2011 より

ダルヴェルジン・テペ

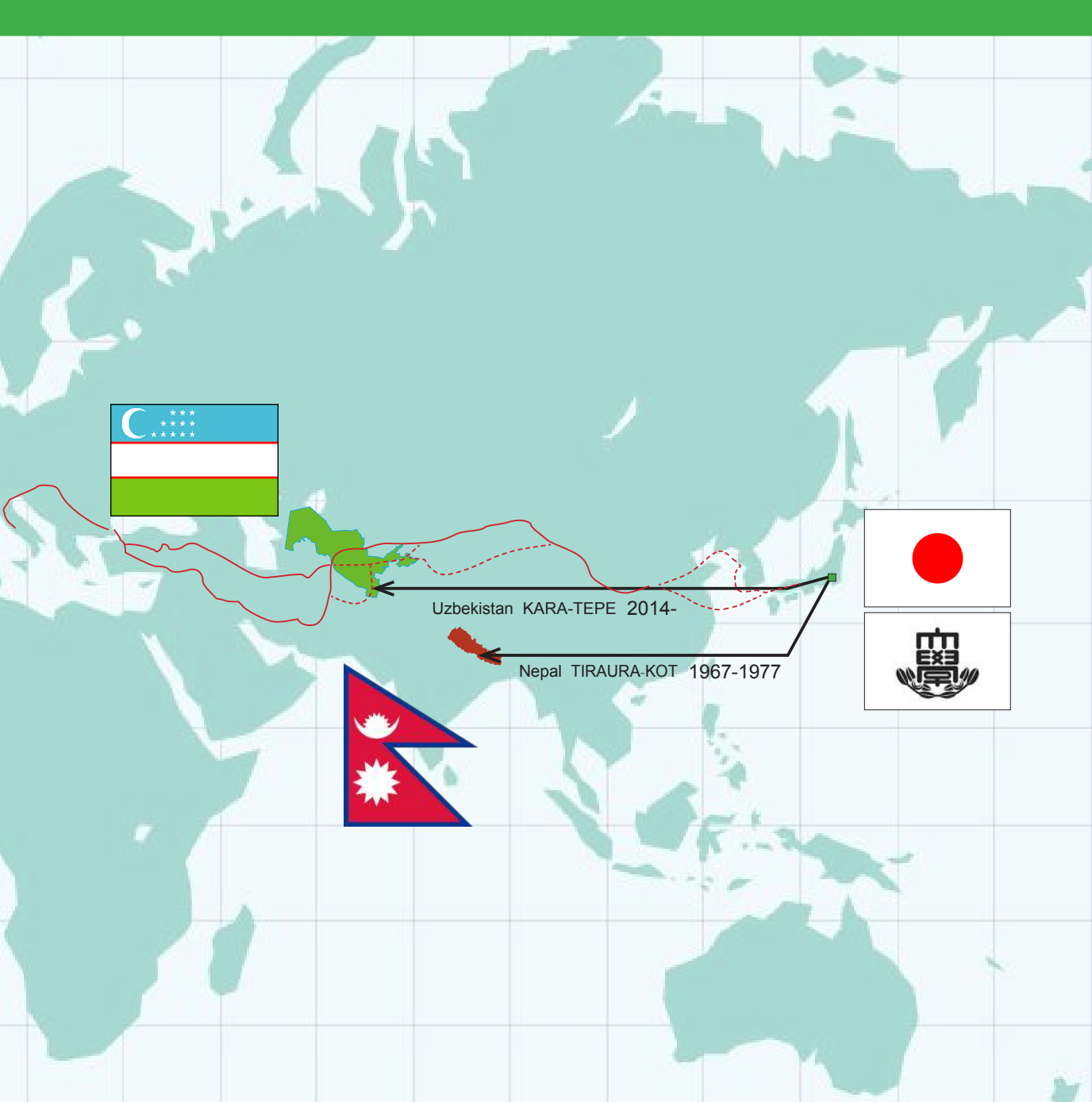
スルハンダリヤ中流域の都城址で、テルメズの北東約 110km のダルヴェルジン村の中にある、スルハンダリヤ流域ではテルメズの遺跡群に並ぶ規模を有しています。商人の邸宅跡からは 36kg の金の装飾品類が出土したほか、仏像も多数発見されています。寺院址も確認されています。ソ連時代の著名な学者はここを大月氏の居城と考えています。



黄金が発見された市民居住区 (=シャフリスタン) の邸宅址。
下中央が内城 (ツィタデル)。GoogleEarth より

アジナ・テペ

タジキスタン共和国南部、クルガン・チュベ市の南東 12km に位置しています。7 ~ 8 世紀の寺院の遺構とされており、平面十字型の構造のストゥーパを有しています。遺構内から巨大な涅槃仏が発見されており、修復作業後は、タジキスタン古代博物館に安置されています。遺跡はユネスコ日本信託基金による保護作業が行われました。現在の国境や地形の関係から、テルメズから 1 日以上を要します。



参考文献

- ・立正大学ネパール考古学調査団
『立正大学ネパール考古学調査報告第Ⅰ冊ティラウラコット本文編』雄山閣 平成12年
- ・立正大学ネパール考古学調査団
『立正大学ネパール考古学調査報告第Ⅱ冊ティラウラコット図版編』雄山閣 昭和53年
- ・立正大学ウズベキスタン学術調査隊
『カラ・テペ遺跡2014年度調査概要報告書』平成27年

【立正大学博物館第10回企画展】

立正大学の海外佛跡調査
ティラウラコットからカラ・テペへ

発行日：平成27年6月19日

編集・発行：立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL：048-536-6150 / FAX：048-536-6170

E-mail：museum@ris.ac.jp

URL：http://www.ris.ac.jp/museum/